

欧州ICTレポート

モバイル・ワールド・コンGRESの熱気

菱沼宏之

2012年2月27日から3月1日まで、スペインのバルセロナにおいて、世界最大級の携帯電話の展示会「モバイル・ワールド・コンGRES」が開催された。来場者数は205カ国から6万7000人で前年比11%増、約40のセッションで講演等が開催された。入場費が個人にとっては高額(4999~699ユーロの4段階)ということもあり、利用者・消費者よりも企業関係者の来場が多かった模様だ。

展示会場に入ると、まずその広さに驚く。バルセロナ五輪でも名が知られた「モンジュイックの丘」を望む5万8600㎡の展示会場が8つのパビリオンに分かれ、59カ国から約1500の企業等が展示していた。日系の企業では、NTTドコモ、NEC、富士通、日立製作所、パナソニック モバイルコミュニケーションズ、京セラ、アンリツ、ソニー・エリクソンなどが出展しており、スマートフォン、LTEやWiMAX関係など、事業化または事業化が目の前の製品、サービスやアプリケーションの展示に加え、研究開発として、我が国が誇るスーパーコンピュータ「京」の展示が目立っていた。また、日本パビリオン11社の展示もあり、中小企業が熱心に出展していた。

各国の企業で比較的目標立ったのは、エリクソン、ノキア シーメンス、クアルコム、シスコ、サムスン、ZTE(中興通信)などであり、アルカテル・ルーセントは一般参加者より個別の商談を重視した作りになっていた。展示の中では、ゲーグルがユニークで遊び心あふれる展示スペースで、Android上で展開するアプリケーションを多数出展して注目を集めていた。また、ファーウェイ(華為技術)の勢いはすさまじく、単独の棟で展示しただけでなく、初日にはリセウ劇場という別会場でイベントを開催し、ITUトゥーレ事務総局長はそちらで講演してからモバイル

ル・ワールド・コンGRESに2日目に顔を出したほか、3日目の夕方には世界遺産の観光地カサ・パトリヨを借り切ってパーティを行うなど、他を圧倒するような存在感を示していた。

講演では、2日目に、ITUトゥーレ事務総局長が登場し、米FCCのマクダウェル委員とインターネットガバナンスやサイバー戦略等について議論を交わしていたのが印象に残る。「国際電気通信規則(ITR)の改正を提案したい」とトゥーレ事務総局長が講演した後に、マクダウェル委員は、「インターネットは世界の自由な貿易・繁栄につながる一方、国家主権は技術者とビジネスの決定を妨げるので、ITUによる新たな規制は妨げになる」と講演した。これには聴衆に戻っていたトゥーレ事務総局長も反論し、さらにマクダウェル委員が再度議論するという一幕が見られた。同委員は共和党系であり、必ずしも現在の米政権の意向を反映しているわけではないことに留意する必要があるが、モバイル・ワールド・コンGRESが政策の打ち出しの場になっていることを実感できるシーンであった。

我が国からは、今回から開始された大臣級プログラムにおけるアジア太平洋地域の地域毎のパネルディスカッションに、吉崎正弘総務省大臣官房総括審議官がパネリストとして参加し、モバイルブロードバンド普及に向けた投資に影響する政策等について議論を行った。司会者からは「日本が(デジタル・ディバイド解消など)政府のニーズと投資促進のバランスをうまく取っているのは素晴らしい。スマートフォンの普及率が高く、高速のインフラ設備があらゆる地域で実現しており、大変興味深い」という旨のコメントを得ており、存在感を示せたのではないかと思う。

※本稿は、筆者の個人的見解である。

※本コラムは欧州在住の6氏によるリレー連載です。